

Title	俳諧教師小林一茶の研究
Author	渡邊, 弘(Watanabe, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.58 (2004.) ,p.164-171
Abstract	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000058-0164

いての提言を生み出すものとはなっていない。容易に提言にまで達しないまでも、せめて、その方向だけでも示すべきではなかったか。この点、著者はせっかくアメリカの公共性に言及しながら、それを新たな提言に取り込もうとする意識に乏しい。

アメリカやカナダには、さまざまなコンセンサスを得るための民間の会議がある。アメリカでの臓器移植ネットワークにはこうした背景がある。これが大事である。つまり民が大きな力をもってくる原動力である。今では、インターネットも整備されているのだから専門家と一般とが意見を交換し社会的な合意を形成することが可能になっている。

移植医療問題は、専門家と素人が、人命ということで対等に議論することが可能である。しかし日本においては、NPO活動をNPO法で保護しようといった矛盾がある。こうしたところにこそ、官の論理が人びとの活動を秩序付けているということが感じられる。著者はこういった点をもっともっと前面に出して論じるべきではなかっただろうか。

日本では新しい価値や意味づけの装置がない。マスコミを含めて新たな活動に対する意味付けを躊躇する。しかも日本では移植で医師が告発された場合でも、判決までに長い時間がかかり、被告としての苦痛を味わうこととなる。このためできるだけ司法的な問題に関わりたくないという感覚をもっている。これらの点は臓器移植に大きな影を落としている。著者の〈公-私〉概念や「公共性」の概念は、まだまだ検討の余地を残している。

IV 審査結果の報告

本論文は以上のような問題点をもちながらも、その独創性を否定されるものではない。本論文の独創性は、日本において心臓移植が進まない理由を、日本の医療を根底で秩序づけている医療行政のあり方に求め、これを地道な調査と長期にわたる研究に基づいて指摘した点にある。本論文は脳死移植医療を通じて、日本における医療と社会との関係に斬新な視点を提起している。加藤英一君の論文は、日本の社会学ではあまり例のない視点に支えられており、社会学の領域の独創的な業績として、審査委員一同は博士（社会学）の学位の授与に値するものと判断した。

博 士（教育学）[平成 15 年 4 月 16 日]

乙 第 3687 号 渡邊 弘

俳諧教師 小林一茶の研究

〔論文審査担当者〕

主 査	慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員 教育学修士	田中 克佳
副 査	慶應義塾大学名誉教授 文学博士	村井 実
副 査	宇都宮大学名誉教授 教育学修士	入江 宏

内容の要旨

本研究は、従来主に文学（特に国文学）の視座から描き出されてきた「俳人」「詩人」としての小林一

茶（1763-1827、宝暦13～文政10）を、「教育」の視座から新たに「俳諧教師」一茶としての人間像を描き出すことにより、これまでの特に日本近世教育史に新たな地平を開拓すると同時に、現代の教育問題を考察する上での一つの手がかりを提起することを試みるものである。

ここでの「教育」の視座とは、教育という言葉の発生事情と意味の吟味に基づいて村田実が定義づける「子どもを善くしようとすること」を共有し、さらに「善さを求める人間」という人間観と「援助する」という形成観に立った、「善さを求める人間を援助する」という教育のとらえ方であり、本研究では特にこの視座を方法的に採用した。

以上のような「教育」の視座から、先の本研究第一の課題を解明するために、本研究は特に次の六点を第一義的課題として実証的に明らかにすることを目的とした。

(1) これまでの一茶研究において描き出されてきた一茶がどのようなものであったかという問題（第1章）。

この点について、一茶の先行研究を踏まえながら、これまでの一茶像がどのように描き出されたのかを考察した。特にここでは、第一に各時代ごとにさまざまな研究者によって描き出された一茶像は異なるものの、「俳人」「詩人」として一茶の人間像をとらえている点では共通していること、特に先述したような「教育」の視座から「俳諧教師」として一茶像を描き出そうという研究は、これまで行われてこなかったということを中心に考察した。

(2) 俳諧教師となるための一茶の修養としての学び（学修）の問題（第2章）。

一茶は、一人前の俳諧教師となるために、特に青年期から壮年期にかけてさまざまな方法で学修している。ここでは、第一に青年一茶が俳諧学校とも呼ぶべき「葛飾派」に所属し、複数の師から俳諧を学んだ点を、第二に丸6年間の西国行脚を通して俳諧修養を積んだ点を、そして第三に江戸における一茶の庇護者であった夏目成美の「随齋庵」を学修の場として一茶が利用した点を、それぞれ実証的に考察した。

(3) 一茶が独自の俳諧学修社中をどのように形成したのかという問題（第3章、第4章）。

専門の俳諧教師となった一茶は、特に40歳を過ぎてから独自の社中を計画的に形成していった。具体的には、房総地方と北信濃地方においてである。ここでは、両地方における一茶の社中形成の動向と巡回ルートを解明することを試みた。

(4) 俳諧教師としての一茶がどのような独自の思想を形成していったのかという問題（第5章）。

この点については、特に一茶の子ども観を中心に、その根底をなす生命観・世界観を併せて考察した。一茶の思想において最も特徴的で根本的な点は、彼の「生きとし生けるものへの親愛」の感覚である。この感覚を根底に据えながら、一茶は子どもを、①弱いものへの共感と激励の目、②成長しつつあるものへの期待と信頼の目、③生あるものへの讃美の目、をもってとらえる。さらに、こうした生命の営みに対する親愛の感覚を根底に据えた一茶独特の境地を、本論では「素童心」（筆者の造語）という概念を用いて解明を試みた。

(5) 一茶が形成した独自の社中において、俳諧教師として具体的にどのような教育活動を行っていたかという問題（第6章）。

この点については、特に独自の社中を形成した一茶が、実際どのように教育活動を展開したのかを、書信添削指導の具体的事例を中心に考察した。また、それ以外のさまざまな俳諧教師としての役割についても検討した。

(6) (1) から (5) の諸問題を解明することによって、どのような新たな教育史的意義および現代の教育問題への示唆が見出せるかという問題（終章）。

本研究の教育史的意義として、次の二点が挙げられる。第一は、従来の教育史研究の視点との相違における教育史的意義である。既述のとおり、本研究は「善さを求める人間」を「援助する」という人間観形成観に立って、特に日本教育史を研究することを目的とした。これは従来の日本教育史研究が採用してきた見方（例えば、明治以降の近代学校を基準としてそこから遡るといった教育史研究や、国家の教化政策を中心に据え「人材」の「養成」という教育観に立った活動の歴史を研究したものなど）とは、基本的に異なるものである。第二は、研究対象における教育史的意義である。1970年頃から日本近世教育史研究において、民衆（庶民）を主体とした研究が盛んとなった。だが、その主な研究対象は、寺子屋、心学、私塾などが中心であり、遊芸のサークルは少なく、また人物研究においてもは俳諧師を取り上げられることは少なく、とりあげられたとしても総合的（あるいは体系的）に研究されたものは、管見に触れる限り皆無である。それに対して、本研究は、先に述べたような教育観に立って、小林一茶という一俳諧教師を取り上げ、しかもそれを「俳諧教師」としてとらえ直し、総合的に考察した。次に本研究の現代の教育問題への示唆に関する点である。この点については、主に次の二点が挙げられる。第一は、現在の学校中心主義や受動的（非主体的）学習などの現代の教育問題への示唆である。第二は、一茶独自の「生きとし生けるものへの親愛」の感覚を根本とした彼の思想がもつ現代の教育問題（いじめや虐待などに見られる生命の軽視など）への意義である。

論文審査要旨

1. はじめに一論文の構成

小林一茶[1763-1827]は、近世後期（とくに文化文政期[1804-1829]）に活躍した俳諧師（俳人）であるが、本格的な一茶研究は明治20年頃からのことである。その後研究に盛衰はあるが、昭和54(1974)年に一茶関連の一次史料のほとんどを収録する信濃教育会編『一茶全集（全8巻・別巻1）』（信濃毎日新聞社）が刊行され、今日、国文学者、歴史家、俳人、作家などによって多彩な一茶像描出が試みられている。それらの先行研究を手がかりに得られた従来の一茶像はいずれも「俳人」「詩人」としての一茶像であった。

本研究は「教育」の視座に立つ一茶像研究を目指し、その人間観、子ども観、教育観を考察するとともに、俳人として一人前になるための修業の過程、「業俳」として自立するための社中の形成の経緯、宗匠としての指導の実態を、豊富に残る日記、書簡、記録等を中心史料として実証的に明らかにし、それらを通じて、近世社会に広く展開した成人の学習活動の工一トス、学習の形態、組織原理等の特質の解明を目指した研究である。

本研究の論文構成は、次のようである。

序章

第1章 一茶像の問題

第1節 一茶研究の歴史 一先行研究を手がかりとして一

第2節 「俳人」「詩人」としての一茶

第3節 「俳諧教師」としての一茶像

- 第2章 若き日の一茶 一俳諧教師への修養一
 - 第1節 俳諧学校としての「葛飾派」と一茶の修養
 - 第2節 一茶の西国行脚における修養
 - 第3節 一茶日記にみる「随斎庵」の諸機能
- 第3章 社中形成の動向(I) 一房総地方の場合一
 - 第1節 寛政3(1791)年から文化14(1817)年までの巡回ルート
 - 第2節 「一茶園月並」と一茶社中
- 第4章 社中形成の動向(II) 一北信濃地方の場合一
 - 第1節 一茶・郷里定住までの社中形成過程
 - 第2節 巡回ルートと一茶社中の特徴
 - 第3節 「長沼連」にみる「連」の諸機能
- 第5章 俳諧教師一茶の思想
 - 第1節 生命観
 - 第2節 世界観
 - 第3節 子ども観
 - 第4節 「素童」の境地
- 第6章 社中における俳諧教師一茶の教育活動 一書信添削指導を中心に一
 - 第1節 一茶「急遞紀」にみる江戸後期の通信事情
 - 第2節 書信による添削指導の事例
 - 第3節 「俳諧教師」としてのさまざまな役割
- 結章 結論と今後の研究課題 /参考文献一覧 /論文執筆者既発表業績一覧

2. 論文の内容要旨

本論文は序章、終章のほか6章をもって構成されている。第1章「一茶像の問題」では、一茶に関する先行研究を、膨大な蓄積のある文学史における研究、ならびに、近年、民衆史、社会史的視点から試みられている日本史研究者による研究を対象に、詳細な批判的検討を行い、そこに描かれた一茶像が、明治中期以降、各時期の社会的、思想的状況を反映して造形されていること、しかも、一貫して「俳人」「詩人」としての一茶像に収斂していることを指摘し、教育史研究の視点から「俳諧教師」としての一茶像を描き出すことの意義を論じている。その際、(1)一茶が俳諧教師をめざしてどのような修養、修学を行ったか、(2)俳諧教師として、自ら形成した「社中」「連」の門人にどのような指導、教育活動を行ったか、(3)俳諧教師としての活動の基底にどのような人間観、教育思想をもっていったかを総合的に考察する必要性を指摘している。

第2章「若き日の一茶一俳諧教師への修養一」では、15歳で江戸に出、渡り奉公の辛酸の中でいつしか嗜むようになった俳諧を以って生業とすること(業俳)を志した一茶が、どのような修業を通して俳諧宗匠として一人前になっていったかを、一茶が克明に書き残した日記類を中心史料に、俳諧集団「葛飾派」に属しての修学、30代前半に行った西国行脚による修業、さらには、彼の庇護者夏目成美(江戸蔵前の札差)の別宅「随斎庵」で開催された月並句会における作句活動を、「業俳」として自立するための学習活動の観点から詳細に検討している。

第3章「社中形成の動向(I)―房総地方の場合―」では、一茶が俳諧宗匠として指導した房総地方の「一茶社中」がどのように形成され、また、社中門人に対し一茶がいわば巡回教師としてどのような指導を行ったかを、「文化句帖」および「七番日記」を中心史料として明らかにした。特に、江戸近郊農村という社会的、経済的条件の中で農村上層である門人のライフスタイルや彼らが構成する社中の特質に着目して、その学習の実態が解明されている。

第4章「社中形成の動向(II)―北信濃地方の場合―」は、一茶が郷里帰住の前後、北信濃地方にどのような学習結社を形成し、また、拡大していったか、さらに、そこに形成された一茶社中にはどのような特色があったかを、日記史料を中心に詳細に検討し、特に、第3節では、一茶社中の中でも最も門人が多く、いわば拠点的結社であった「長沼連」を事例に、「連」の機能を分析している。

第5章「俳諧教師一茶の思想」では、以上に見てきた一茶の教育活動を支える思想を論じている。二万句にも及ぶ一茶発句の中で一茶が好んで詠んだ森羅万象の「生命」(とくに小さな生命体)を主題とする発句や俳諧歌・俳文を通して一茶の生命観の特徴が検討され、次いでそれらの生命体の織りなす世界が「天地大戯場(劇場)」の概念を中心に自然現象をも含む一茶の共生的世界観として捉えられている。その上でこれらの生命観・世界観と一茶俳句の特色をなす多数の子どもの句(約400句という)を踏まえて一茶の子ども観の特徴(弱いものへの共感と激励の目、成長しつつあるものへの期待と信頼の目、生あるものへの賛美の目の三特徴)が詳細に検討され、最後に、これらの生命観・世界観・子ども観を踏まえた俳諧教師一茶の独自の境地の提示が試みられている。この一茶像の核心をなす境地の表現は、多くの研究者たちによって様々に試みられてきた。それらの様々に表現される境地に共通の根底をなす一茶の境地の指摘が可能であり、それは、生命観・世界観・子ども観を貫いている一茶の生きとし生けるものへの親愛の感覚の働きであるとして筆者はこれを「素童心」と呼んでいる。「素」は「素心」であり、人間が成長し成熟していく中で「死」と向き合いながら知識や経験から解放されて、改めてありのままの自分を認識し、「生命」への優しさが純化していく方向である。一方「童」は「童心」であり、子どもの無邪気で、いとけなく、可愛らしい幼心の純真さの方向である。この両方向が一茶の場合複合的に融合して働いていたという観点に立って、これを「素童心」と呼んでいる。

これが一茶の創作活動の基本的構えであり、思想の根底であり、一茶の世界として展開され、句に表現されることになった。俳諧教師一茶は、生きることへの親愛の道において「素童」の境地に入り、多くの「素童句」をもっていわば共生的世界を人々の前に写し出すことができた。そしてそのことによって、俳諧に新たな歴史を開き、同時に人々の間にすぐれた修養の教師として立ち現れることになったと述べている。

第6章「社中における俳諧教師一茶の教育活動―書信添削指導を中心に―」では、一茶が彼の率いる俳諧結社の門人を対象に行った指導の実態を、書簡による通信添削指導を中心に考察する。ここでは、「急遞紀」と題された一茶自身の発来信の控えを中心史料として、当時の郵便事情の実際を解明するとともに、下総馬橋の油問屋を営む門人大川平右衛門(俳号斗圃)に対して行った書信による指導、北信濃善光寺の薬種問屋文路等に行った指導、晩年に一茶自身が江戸の夏目成美から受けた指導の事例を詳細に検討している。さらに日記や書簡によって、俳諧師匠としての一茶の活動が、書信による添削や歌仙の際の直接指導に止まらず、門人への月並俳諧への出句の奨励、書籍の貸借・紹介、知人への門人の紹介等にわたっていたことを明らかにしている。

終章は「結論と今後の研究課題」となっている。

3. 論文の特色・独自性

(1) 本論文は、表題にも示されているように、もっぱら史上に俳諧師として知られてきた小林一茶を、あらためて教育史上の人物—俳諧教師—として研究対象にとりあげ、その生涯と活動の特色を教育史の文脈において捉えようとした試みと理解される。

歴史上の人物の研究としては、従来からの諸研究成果のいわば延長線上に新しい寄与を意図する場合もあり、また従来からの研究に対して観点上、方法上等での多少とも新しい展開を企てる場合などもありうるであろうが、本論文は、従来もっぱら文学史上の人物として見られてきた俳諧師小林一茶をとりあげ、その生涯と活動とをあえて教育史の観点から描き出すことを試みた点に、明確な研究上の特色をもつものと言える。

この特色に関しては、とうぜん従来の歴史研究上での二つの問題点が指摘されなければならない。

一つは、一般に従来の歴史研究が、たとえば政治史、経済史、文学史、芸能史、教育史、等々、とかく狭く縦割りに進められることが多く、横断的に柔軟な関心や視点が研究上にほとんど生かされえなかったということである。

そしてもう一つは、とくに日本教育史にとっての問題であるが、明治維新をもって教育体制が一新されて今日に及んだという特異な歴史事情のために、それ以前の体制が研究上でもとかく軽んじられ、近代学校教育体制のいわば前史でしかなかったかのように取り扱われがちであったということである。

したがって本論文は、従来の歴史研究上の以上のような問題点の克服に向って積極的に寄与するに足る試みと見られるのであり、その意味で特色に富む研究と認められる。

(2) 教育史研究、とりわけ近世教育史研究は、その方法論の転換が求められている。日本における教育史研究は、近代学校制度の展開を背景に、その方法論も、いわゆる「学校中心史観」とよばれる学校制度中心の叙述に偏ってきたが、この傾向は近世教育史研究にも及び、いわば「学校社会化」以前の社会であった近世の多様で豊かな教育的営為に目を向けることなく、ひたすら、近代において成立したスクールシステムの諸概念を無媒介に遡及してこれに適用し、近世の教育は近代公教育制度をいかに準備したかという観点からのみこれを叙述することに終始してきた。しかし、近年、こうした研究方法に対する反省から、近世社会の教育的営為を、いわば歴史内在的に把握することから出発し、そこから、近代的学校教育制度を相対化し、近代社会の教育システムの問題点を近世の側から逆照射する方法が求められてきている。

アナロジーとして表現するならば近世社会は一種の生涯学習社会であり、豊かな成人学習社会であった。近世に成立した多くの学舎（藩学、郷学、私塾等）はその実態は成人学習機関であり、また、人びとが結成した社中や連は、まさに、学習サークルであった。今後の教育史研究は、これまで軽視されていた商人社会や職人社会における徒弟制教育システムの解明等を含め、これらの実態を明らかにすることを通して、近世教育史の再構成が求められている。本論文はこのような教育史研究の新たな課題を開拓する先駆的研究の一つと位置づけることができる。すなわち、一茶という極めて個性的、具体的人間像に着目し、書簡、日記、諸記録等その豊富な史料を駆使しながら、地方の農村出身の青年が遊芸の師匠として自立するまでのいわば教養形成過程を可能な限り明らかにするとともに、近世社会における学習結社であった社、連の形成過程および機能を実証的に明らかにした本研究は学界に大きな貢献をなすものと評価できる。

(3) 本論文においては文学作品が史料として用いられ、また、対象人物（一茶）の文学活動そのものが考察の対象になっている。したがって、当初から方法論上困難な課題を背負っていたといえよう。前者については史料論的吟味が求められ、後者においては、そこに常に、歴史学的実証の視点と文学鑑賞的観点との間の緊張関係が自覚化されなければならなかった。たとえば、一茶が俳人として自立するためにどのような学習活動を行ったかを考察することは、単に、彼が手にした書目を調べたり、俳壇における師弟関係を考察するに止まらず、文学史研究者が重視するいわゆる「一茶調」と呼ばれる発句のスタイルを、いつ頃、どのようにして身に付けたかの考察を欠くわけにはいかならないと思われる。また、その過程で、一茶の学習は中国の古典、たとえば、詩経や易経にまで及んでいるが、その理解の水準を考察するとすると、彼が行った詩経俳釈や易経俳釈の内容はもとより、丸山一彦が試みたような一茶の句と詩経、易経との関係の詳細な分析も視野に入れなければならない。本論文は、このような困難な課題の中で、文学史研究上の先行研究を視野に入れ、それを十分に咀嚼しながらも、文学的関心や鑑賞的態度に溺れることなく、これに抑制を加え、あくまでも実証的方法に基礎を置き、教育史的視点を貫いている点を評価したい。

(4) この論文の独自性として、互いに密接に関係しあった二つの側面が大まかに挙げられると思う。第一は一般的な教育史研究としての側面であり、第二は小林一茶という人物に特定した研究としての側面である。

第一の側面は、上記にこの論文の歴史研究上の特色として指摘したことがらにほとんど重なると言ってよい。つまり、従来もっぱら俳人、あるいは俳諧師として文学史的研究の対象とされてきた小林一茶という人物を、論文の表題が示すようにあらためて「俳諧教師」として捉え、新しく教育史上の研究対象にとりあげたということである。

この「教育史上の研究対象」という点については、特記しておかなければならないことがある。それは、わが国での教育史研究が従来とかく学校教育を関心の中心に置き、その周辺的な対象として社会教育、あるいは庶民教育等を位置付けてきたのに対して、最近では世界的にも研究対象としての「教育」の概念自体に了解の幅が広がられて、それをいわゆる「形式的教育」Formal education の範囲に限らないだけでなく、むしろ進んで「文化の選択的伝達」行為の総体と見なそうとする傾向すら生じているということである。おのずと教育史の研究にも、「教育」についてのこうした視界の広がりが求められないではないわけである。

したがって、とくに本論文において、研究上従来もっぱら文学史上の対象であった人物を進んで「教育」史上に移して見直そうという視点が採用されたことについて、上記の「教育」概念の広がりへのいわば世界史的な傾向との照応が認められるということにも、少なからぬ興味を感じている。

第二の、小林一茶研究としての側面については、一茶の生涯がとりわけ教育史の対象としてとりあげられた結果として、彼の生い立ちとその環境をはじめ、生涯を通じての生活の特色、人々との交流、交渉、創作活動、その成果としての作品の特色、人間観、世界観、宇宙観、等の特色はもちろん、とりわけ彼の教育的関心を中核とする社中形成の活動、「俳諧寺」によっての北信濃での教育活動、通信手段による広域的な添削指導活動、等に至るまで、すべてが一貫した「教育」観のもとに新鮮な一茶像となって浮かび上がることができたという成果が挙げられる。

4. 問題点と今後の課題

(1) 論文の内容構成は、本論文の課題に即しておおむね妥当であるが、第5章「俳諧教師一茶の思想」

の位置は問題であろう。3、4章は一茶社中の形成に関する実証的研究であり、6章もまた社中に対する書信による添削指導の実証的研究となっている。その間に、思想史研究、しかも、一茶の教育活動の根底にある思想の考察が入ることには違和感がある。本論文における章の構成は一茶の修養、修学、社中の形成、社中に対する指導と、ほぼ、彼の生涯に即して論述される形になっており、第5章でとりあげた一茶の思想が比較的彼の晩年に至って形成されたものであることから、著者はこのような位置に章を設定したものと考えられるが、前述のごとく、実証的論述の中に、思想史的内容の章が挿入されるのは問題である。むしろ、終章の前に置く方が妥当であったと考えられる。

(2) 第5章では一茶の思想をその生命観、世界観、子ども観において考察し、さらに、彼の教育活動の根底をなした資質、人間性が論じられている。その内容には創見があり、新たな知見が加えられているが、本論文が俳諧教師一茶をテーマにしている以上、彼の思想を問題にするならば、やはり、彼の教育思想、社中門人への指導観、教育観が論じられるべきであろう。たしかに、一茶にはその教育思想をまとめて示すものは残されていないが、そうであれば、彼の教育活動そのものから彼の指導観、教育観を析出する方法が工夫され、試みられても良かったと思われる。これは、今後の課題として期待したい。

(3) もともとが野心的な試みと呼ぶに値する研究であることから、現状での本論文に関しては、とりあげられた項目の全体にわたって、さらに一步、二歩、あるいは三歩にも及ぶ追求の深まりと、叙述の上での洗練を求めたい気持ちは抑えがたい。しかし、こうした点での研究の充実と発展は、筆者の今後の時間をかけた精進に期待したいと思う。

5. 審査結果の報告

以上、本論文は、若干の問題点を指摘できるものの、教育史研究の新たな課題に立ち向かい、従来の学界における研究の空白を埋めた画期的論文として、博士（教育学。慶應義塾大学）の学位の授与を妥当と判断する。

博士（社会学）[平成16年1月14日]

乙 第3752号 中野 紀和

小倉祇園太鼓の都市人類学的研究—ライフヒストリーからみた 都市の文化動態

〔審査担当者〕

主査	慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員 文学博士	鈴木 正崇
副査	慶應義塾大学名誉教授・國學院大學神道文化学部教授 文学博士	宮家 準
副査	慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員 社会学博士	有末 賢
副査	名古屋大学大学院文学研究科教授 社会学博士	和崎 春日